



オリオン座

甲南高校三年 野村 朋生

僕の部屋からは星が少し見える。

小学一年生の頃、僕は全く学校に適應できていなかった。今の比でない位、学校を嫌っていた。そんな僕は、学校の図書館で月についての本を読んでから宇宙に興味を持ち、完全にハマっていた。図書館に通っては、星座とか、惑星とか、太陽系とかの本を読んだ。その頃のとっておきの雑学は「月の表面のデコボコはクレーターという名前である」とか「太陽の外にはコロナというガス層がある」とかそういうかわいものだった。しかし、そうしながら宇宙について小学一年生なりに知ろうとしていたし、今より確実に宇宙とか星座については詳しくかった。そしてその熱はしばらく続いた。

小学四年生の頃、テレビで「宇宙兄弟」のアニメを見ると、多くの少年少女と同様に、宇宙飛行士に憧れて本気で志した。

「半成人式」で将来の夢を発表するとき、宇宙関係の職に就き大病院のため、今年で卒業。家族にとつては僕が生まれてすぐに運ばれて手術した、ある意味思い出の病院だ。そして毎年、家族旅行を兼ねて行く福岡への病院は僕にとつての夏の風物詩だ。母と父、あるときは妹だったり祖父母父だったり毎年さまざまなメンバーで旅行した。天神に行ったり、好きなミュージシャンのライブに行ったり、受験を控えた年には太宰府天満宮に行ったり、ある年は壇ノ浦や下関砲台を見に行ったり、門司に行ったりと飽きることはなかった。毎年、さまざま思い出がある。そんな家族旅行も今年で最後だ。そんなことを考えながらぼんやりと車に乗っていた。

ふと、窓から外を見ると暗い空にオリオン座のような並びの星が見えた。オリオン座しかわからないので見間違えるはずがない。しかし、今は八月。オリオン座は冬の星座じゃなかったか。小一で培った知識で問うてみる。助手席の父に聞いてみると「見間違いないか」との返答。窓の外も見ずに。僕がオリオン座を間違えるわけがないと、妙な自尊心と共にスマホを調べると、件の星座は夏の明け方にも見えるという。

きつと今日のこの瞬間は忘れない気がする。冬の風物詩だったオリオン座が夏の風物詩の家族旅行とつながった。少し高揚を感じた。冬の夜に眺めていた星座と夏の夜明けに会ったこのとき、僕にとつてこの星座が大きな意味を持ち始めた気がした。小学一年生の頃宇宙にハマっていた僕。宇宙への情熱は持ちつつも宇宙への夢を打ち明けられずに、いつしか諦めた僕。自

たい、と本当は思っていたが、恥ずかしくてそれほど漫画が好きであつたわけでもないのに、「漫画雑誌編集者」を夢として発表したこともあつた。でも、やはり宇宙が好きで、夏休みには内之浦の宇宙観測所の見学にも行った。

そんな宇宙大好きキッズだった僕だが、宇宙への熱はその頃にピークに冷めてしまった。少し成長して持病のため宇宙飛行士は厳しいかも、と察したからかもしれない。そして、かつて培った知識はほとんど失われてしまった。今では、判別できる星座はオリオン座くらいのものだ。

冬になり、自室のベッドに横になると仰角が大きくなって、空の少し上の方まで見えるようになる。十一月ごろだろうか、冬になるとオリオン座が現れる。それが見えるようになると冬の訪れを感じ、見え始める時間が早くなるにつれ、冬の深まりを感じるのだ。僕が自室を持ち始めたのは中学一年生の頃だ。だから、もう五年と四ヶ月くらいそういう生活を続けている。十八年に満たない人生の中で、この生活は三分の一くらいを占める。そう考えると少し長い間、これは僕の冬の間の習慣であるといえる。

二〇二〇年、八月十七日午前四時ごろ。九州自動車道上の車内。空はまだ暗くて、星がたくさん見える。

僕は生まれつき心臓が悪く、毎年福岡の病院に行く。普段ならば新幹線を使うのだが、今年はコロナの年だ。人との接触を防ぐために車での遠征となった。十八年通った病院は小児科の室を持ち、冬の空のオリオン座と共に就寝していた僕。毎年、心臓の病気のために通院し、ついでの旅行を楽しみにしていた僕。断片的だと思っていた全てが今日、一つに収束した気がした。

きつと来年の今頃、僕は一人で暮らしている。どこであろうとも、オリオン座が見られる部屋だつたら、いいなと思う。きつと、その砂時計みたいな形を見るたびにこれまでの十八年の思い出を少しでも忘れずにすむ気がするから。そして新しい場所での新しい全てを、どこに居てもその星座を見るたびに思い出す気がするから。そんなことをぼうつと考えていると少しずつ曙光が差ししてきた。

(大山 結花先生指導)

(審査員評) 宇宙にაცგれ夢中になった少年時代や夢を諦めたことなど、自己を客観的に深く見つめ、押さえた筆致で描かれている。そして、高校三年の夏、冬の夜に眺めていたオリオン座が夏の夜明けに見えたという気づきから、断片的な出来事が一つに収束したと感じるまでが、疾走感のある文章で一気に書かれているため、読み手は引きこまれていく。オリオン座のように家族が大きな変わらぬ存在としてそつと見守っていること、曙光に包まれるような明るく希望に満ちた未来が待っていること感じられる優れた作品である。